

お忙しくても、約 2 分間で読めます

ハートフル・ワード (心からの言葉)

山内公認会計士事務所

TEL 098-868-6895

FAX 098-863-1495

経営者への活きた言葉

事業の内容をよくし続ける企業が成長の機会に会う (P. F. ドラッカー)

1. 重要なことは、人材の質を維持し、向上させ続けることである。有能な人材を惹きつけられなければ、立ち腐れが始まる。その結果生じる衰退を逆転させることはできない。不況期においてさえ、有能な人材は、挑戦や機会がなく、何かを達成したり、成果をあげたりすることのできないところにはとどまらない。不況期にあって、あるいは不況のあと、衰退していく企業が少なくない。これこそ、経営者の責任である。
2. ゼロ成長時こそ、社員一人ひとりの仕事の内容を大きくし、挑戦のしがいのあるものにしなければならない。不況のために、成長はできない。しかし、量的な成長はできなくとも、質的な向上はできるはずである。成長ができないのであれば、事業の内容をよくしなければならない。あらゆる組織、あらゆる人間が、常時、挑戦するものを必要とする。組織には挑戦すべき目標が必要である。その時、徹底して検討すべきことが、自分たちの強みは何か、その強みはどこに適用すべきかである。自らの強みを知り、その強みに集中することによってのみ、不況になって、ひと足先に飛び立つことが可能となる。
3. 成長の機会は、長期の不況時にあっても扉を叩く。1930 年代にも、企業、病院、大学を問わず、事業の内容をよくし続けていた組織には成長機会が訪れた。機会は、それに値する者の扉だけを叩く。

(参考:「週刊ダイヤモンド」2009 年 1 月 17 日号)

人事・労務について

当たり前の仕事を通じて考え方の基本はてきる

伊丹 敬之 (東京理科大学教授)

1. 本質的なところに思考を転換するには、一つは働く意味や、企業がなぜ世の中に存在するかを、ごく素朴に自分の頭で考えてみる。それが仕事を通じて学ぶうえで最も大切な原点である。自分なりの論理を作ることが大切だ。もう一つは、企業とは、働くとは何かということを素朴に考えた人の本を読んで、世の中にはこういう考え方もあるかと啓発されることだ。
2. 大工さんの世界には「研ぎ 10 年」という言葉がある。宮大工の修行の最初の 10 年は、自分の刃物をとにかく研ぐ。刃物や砥石と会話しながら、刃物と砥石がこう擦れると鉄がどうなるか、そういうことを細かく考える。本当に立派な大工さんが育つプロセスでは、研ぎという当たり前の、単調に見える仕事に深く突っ込ませることで、実はその人の考え方の基本みたいなものができていく。

(参考:「週刊東洋経済」:2009 年 1 月 17 日号)

経営者のための危機管理

マイナス情報を重視する

1. 1997 年の倒産からさかのぼること 3 年前。香港にいた当時の和田一夫代表は、取引先から「ヤオハンジャパンがおかしい」と苦言を受けた。ヤオハンの社員が取引先に無理を押し付け、店ではお客の要望に平気で「ノー」と言っている。だが、和田氏は取り合わなかった。「こういう兆し情報は最も大切にすべきものです。しかし、私は忙しさやそんなことはないだろうという思い込みなどによって、その情報に対する的確な対処を怠ってしまったのです。それを見過ごしたのは私自身の驕りというべきものです」。
2. 事態は予想以上に深刻で、それから 1 年足りずの 1995 年 3 月決算に、上場後初の赤字を計上。坂を転がり出した年商 5000 億円の巨大企業が終えんを迎えるのは、それからわずか 2 年後だった。マイナス情報を素直に聞き、どれほど危機感を持てるか、がポイントだった。

(参考:「日経ベンチャ」2009 年 3 月号)

古典に学ぶ

同門の友

「かの孔子が論語の始めに“朋遠方より来るあり、亦^{とも}楽しからずや”と言っている朋というのは、実は“同門の友”ということだそうであります。すなわちただ遠方から友人が訪ねて来たというだけでなく、師を共にし、かつては師の許で起居を共にした同門の友が、その後国へ帰って、互いに遠く離れて住んでいる。それがはるばると訪ねて来たというわけです」

(参考:森信三「修身教授録抄」:致知出版社)